

『更級日記』東山の記再読

伊藤 守 幸

一

最近『更級日記』中の東山の記（「四月つごもりがた、さるべきゆゑありて、東山なる所へうつろふ」という一文に始まり、半年程の東山滞在記とその後日譚的挿話を語った記事——万寿二年から三年、作者十八歳から十九歳へかけての記事と推定される⁽²⁾）に関する興味深い〈読み〉が、相次いで提起されている。

佐藤和喜氏は「更級日記歌の位相」⁽³⁾という論において、『更級日記』に「歌とは平静な時——自己を十分観照しうるときにあれこれ考え及ぼして詠むものだという、構成的な詠歌観が示されている」ことを検証し、その過程で東山の記についても解釈上いくつかの新しい視座を提示している。また、深沢三千男氏は、「更級日記の源氏物語受容の一面——東山滞在記後における「春まで命あらば」の位置づけを中心に、潜流する文脈——」⁽⁴⁾において、東山の記を中心に、『更級日記』と『源氏物語』との間に潜在的影響関係を読み取ろうとする試みを行っている。深沢氏の論考は、昭和六十一年五月中古文学会における口頭発表をもとにまとめられたものであるが、その発表に關しては、「王朝女流文学研究の軌跡と展望——『伊勢集』・『更級日記』を中心に——」⁽⁵⁾と題する拙文において、作品外部に開かれた「潜流する文脈」に対する読みと、作品内部からの読みとの相補的な關係について、ごく概括的な感想を述べたこ

ともある。

いずれにせよ、こうした新しい研究動向に刺激を受けて、改めて東山の記を読み直してみようというのが本稿の眼目であるが、実は東山の記に対する私なりの基本的な捉え方については、既に「『更級日記』の構造——家集的章段を中心に——」⁽⁶⁾という拙稿において触れたことがある。表題に「再読」と付した所以でもあるわけだが、今、論述の便宜上、その論点を簡単に再確認しておくことにする。

右記の論考は、従来作品構成とのかかわりが稀薄であり雑纂的なものと捉えられることの多かった所謂家集的章段について、前後の文脈との関係といった表層的レベルを超えて、作品総体の中にその存在の意味を読み解き、ひいては作品の構造を明らかにしようと試みたものであるが、その中で、典型的な家集的章段と目される東山の記に関しては、それを作者少女期の「あらましごと」の想像的实践として捉える観点を提示しておいた。

東山にまつわる一連の記事の後に置かれた「あらましごと」とは、次のようなものである。

「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおぼえけり。

良く知られているこの「あらましごと」が、少女期のあてどない夢について執筆時点において整理して記されたものであることは言うまでもないとしても、現実から遊離した物語的空想の浮薄さを強調しようとする文脈とは別に、実際の少女期の孝標女にとって、こうした「あらましごと」が、単なる漠然たる夢想といった域を超えて、より積極的に想像力的に生きられていたことが、東山の記の存在によって知られるのである。すなわち、東山移住の現実的側面については「さるべきゆゑありて」と受け流すことによって、以下に展開される和歌詠作を中心とする一連の記述

は、まさしく「山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて」といった世界を現出しているのである。

思えば、このように東山の記を「あらましごと」の想像的实践としてかたどられたものと捉えたとき、それが言わば「源氏物語のまねび」として成り立つ世界であることも、また、作者の主観的「浮舟ぶり」も、おのずと明らかだったのではあるが、作品間の直接的、具体的影響関係の次元を超えて、「潜流する文脈」なるものまで読みこもうとする深沢氏の大胆な方法とは逆に、本稿では作品内部の文脈に即しつつ、東山の記を読み解いてみたいと思う。右に述べたように、東山の記の存在意義に関する基本的視点は既に提示してあるといっても、これまでのところ、それ以上細部にまでわたる詳細な読解を試みたことがあるわけではないので、物語的幻想として育かれた「あらましごと」を、和歌の詠作を通じて想像力的に生きつつある作者が、同時に（ことに和歌の贈答といった場面を通じて）どのように他者との関係を成り立たせているのかという点については、改めて考え直してみたい問題があるし、また、家集的と称される東山の記が、それ自体すぐれて構成的に作り上げられた、意外に堅固な構造体なのではないかという見通しもある。そうした問題意識をもって、以下、具体的に作品を読み進めて行くことにする。

二

東山の記は、半年程の東山での生活を和歌中心に描いた東山滞在記と、その後日譚めいた記事とに大きく分けられるわけであるが、東山滞在記の部分は、

四月つごもりがた、さるべきゆゑありて、東山なる所へうつろふ。道のほど、田の、苗代水まかせたるも、植ゑたるも、なにとなく青みをかしう見えわたりたる。

という文章に始まり、

京に帰り出づるに、わたりし時は、水ばかり見えし田どもも、皆刈りはててけり。

苗代の水かげばかり見えし田の刈りはつるまで長居しにけり

と結ばれている。この明解な首尾照応の仕方を見るだけでも、この東山の記が周到な構成的配慮のもとに書かれたものであろうという予測は立つ。

そもそも『更級日記』の記事が、一見雑纂的に見える細部にいたるまで、作品総体の中で有機的に構造づけられているということは、前記拙稿において縷述したところであった。右の東山滞在記の結構などは、作中の小部分におけるきわめて明解な首尾照応の一事例であるが、たとえば最近の高橋文二氏の論の中では、日記の冒頭に描かれた薬師仏と晩年の来迎夢に現われる阿弥陀仏について、「それは決してあらわではないが、微妙に照応しながら、この日記を縁取っているように思われる」⁽⁷⁾という指摘がなされている。これなども、作品の総体を念頭に置いて考えるとき、その方向性において基本的に正当な捉え方と言えるのではないだろうか。『更級日記』の作品構造は、偶然と言って済ますには余りに複雑な、記事相互の照応関係によって支えられているからである。⁽⁸⁾人の一生が所詮偶発事の連続にすぎないとしても、偶々起こった出来事を作意もなく書き並べたところで、『更級日記』のような作品が出来るはずもないことは明らかである。

さて、先に引用した苗代の風景に続けて、東山の記は以下のように書き進められる。

山のかげ暗う、前近う見えて、心ぼそくあはれなる夕暮、水鶏いみじく鳴く。

たたくとも誰かくひなの暮れぬるに山路を深くたづねては来む

「あらましごと」を記した部分では「花紅葉月雪をながめて」などと常套句を口になっているものの、作者が東山の

記の詠作において実際に取り上げている景物は、「くひな」、「ほととぎす」、「鹿」等といったものである。しかし、ここで見逃せないのは、そんなことよりも、東山の「山路」に歩み入りつつある作者が、既に早くも自身を山里の人として措定し、都人から思い捨てられたかのような発想の歌を詠んでいることである。こうした発想の歌は、この後も繰り返し詠まれることになるので、まず注意しておく必要がある。

続けて記述は、「しづくに濁る人」との贈答にうつる。

霊山寺に参拝した作者一行は「石井」のほとりで休息するが、そのとき「この水のあかずおぼゆるかな」と口にした人に対して、

奥山の石間の水をむすびあげてあかぬものとは今のみや知る
と詠みかけた作者は、

山の井のしづくに濁る水よりもこはなほあかぬこちこそすれ

という返歌を得る。そして、「このしづくに濁る人は、京に帰るとて、心苦しげに思ひて、またつとめて」、

山の端に入日の影は入りはてて心ぼそくぞながめやられし

という歌を送ってよこすのである。

この記述を読むかぎりでは、「しづくに濁る人」が何者であるのか、判然とはしない。男女の別さえ定かではないのである。ただ、この場面が、その背後に紀貫之の「むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」という歌を踏まえていることは明らかであり、『古今和歌集』離別歌所載のこの歌が、「いし井のもとにてもいひける人」に対する「そこはかかない恋心」⁽⁹⁾、乃至は「肉体的な渴望感」⁽¹⁰⁾を内包することも諸家の説かれる通りである。したがって、そのような歌を前提とする以上「しづくに濁る人」は男性であり、この贈答には恋の気分も秘められてい

るのではないかという推測も成り立つわけである。そして、そのような読みの可能性をさらに推し進めて、「しづくに濁る人」は亡姉の夫であろうという魅力的な仮説を立てたのが、稲賀敬二氏の「孝標女の初恋の人は「罌に濁る人」か」⁽¹⁾という論である。「最も切なる思いを「心のうちに」抱き続けて、決して人前に示さない」という孝標女の性格を大前提として、そうした韜晦のヴェールを剥ぎ取り、東山移住の現実的側面を明らかにしようとした稲賀氏の論は、あくまで仮説としてしか扱い得ない事柄を問題にしたものとは言え、その論証の過程は興味深く、また相応の説得力を持つものである。ただ、私として、今、そのような試みの可能性に立って論を進めようと思わないのは、稲賀氏の論の前提となっている作者の韜晦の姿勢が、この場面に關しては、稲賀氏の仮説とは逆の読みをも導き出しかねない多義性を孕んでいるからである。すなわち、特に恋愛感情のような微妙な問題の場合、あったことを無かったようにおぼめかした書き方をしていると読むことが可能であると言う場合には、当然その反対に、無かったことをあったように書いている可能性についても考慮に入れなければならないはずである。既に見たように、「しづくに濁る人」との贈答に恋の気分の揺曳を認める読みは、直接的には貫之の「むすぶ手の……」の歌を媒介として成り立つものであった。その意味で、これはすぐれて文学的に醸成された恋の気分と言うことができる。となれば、それは文学的に仮構された恋の気分と紙一重とも言えるのではないか。例の「あらましごと」の前半部には、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて……」と、物語に触発される形での恋愛幻想が語られていた。このような幻想が、和歌の詠作を通じて現実の場に想像的に解き放たれた場合、どのような事態が起こり得るか。『源氏物語』を暗誦するほどの文学少女にとって、貫之の歌を利用しつつ恋人との別離の一場を演出するくらい、たやすいことだったのではないか。その場合、贈答の相手に要求されることは、一義的には作者と文学的幻想を共有し得ることであり、彼（もしくは「彼女」）である可能性さえ否定しきれな

いわけだが）が現実には孝標女の恋人であることは、必ずしも絶対に必要な条件というわけではない。そうしたことから、本稿では、「しづくに濁る人」については、彼（もしくは彼女）が、東山の記に登場する人々の中でも特異な「例外者」であることは認めるものの、それが「例外」である所以については、「物語歌のことをのみにしめ」がちな作者と、同一次元において心と言葉を通わせ合うことのできる人であったという点に限っておくこととしたい（もとより恋人である可能性を否定はしないし、あくまで現実的根拠を追求した場合には、稲賀氏の仮説が説得的なものであることも認めた上であるが）。

なお、「しづくに濁る人」をそのような例外者として認める場合、そうした捉え方は、単に東山の記の内部にとどまらない問題を内包しているはずである。「しづくに濁る人」と同じような意味で作者と言葉が通い合ったと思われる人物は、作品全体を見渡しても、少女期の「姉妹母などやうの人々」を除けば、源資通と若干の宮仕え仲間くらいのものである。その意味で「しづくに濁る人」は、作者がその生涯において巡り合うことのできた、数少ない例外者のひとりと言うことができる。

さて、「しづくに濁る人」との贈答に続いて、四月中の記事として、

誰に見せ誰に聞かせむ山里のこのあかつきもをちかへる音も

都には待つらむものをほととぎすけふ日ねもすに鳴き暮らすかな

という、眼前の景物（ほととぎす）に触発された二首の歌（作者自詠）が記され、さらに「都には……」の歌に続けて、

などのみながめつつ、もろともにある人、「ただ今、京にも聞きたらむ人あらむや。かくてながむらむと思ひお

こする人あらむや」など言ひて、

山ふかく誰か思ひはおこすべき月見る人は多からめども

と言へば、

深き夜に月見るをりは知らねどもまづ山里ぞ思ひやらるる

という贈答が置かれている。ここまでを一連の記事と捉えれば、都と山里とを対比する発想を、如上の四首に共通する発想として抽出することができるが、時間的継起性という事に関しては、「都には……」の歌が四月「つごもり」に詠まれているため、その後の贈答が「月」を話題としていることに不審が残る。その点については、稲賀氏の前掲論文に、これらの贈答の背後に「遅く出づる月にもあるかな山の端のあなたの里も惜しむなるべし」、「夏の夜は月にぞ飽かぬ山の端のあなたの里に住むべかりけり」（ともに『古今和歌六帖』所載）といった歌の存在を想定する解釈があり、佐藤氏前掲論文では、「孝標女には現実的な時間を歌に厳密に対応させるという意識などなかったと見るべきではないか。前歌とのつながりが心理的にたどればそれで十分なのであり、それほど、歌は自立的な存在であったのである」という指摘がなされている。詳しいことはそれらの論を参照してもらいたいが、いずれにせよ時間的継起性という点については、やや疑問の残るところではある。ただ、今はその問題はひとまず置いて、ここで留意しておきたいのは、孝標女の返歌「深き夜に月見るをりは知らねどもまづ山里ぞ思ひやらるる」（彼女は実際には山里に身を置いているわけであるが、自分がもし都にいたならばまず……という発想である）と、先に見た「しづくに濁る人」の「山の端に入日の影は入りはてて心ぼそくぞながめやられし」という歌（これはもちろん実際に都で詠まれている）との、みごとに相呼応する関係という一点である。これら二首を対比してみれば、「しづくに濁る人」が作者と心を同じくする人であったことが、改めて確認されるであろう。

さて、日記の記事はさらに次のように続く。

曉になりやしぬらむと思ふほどに、山の方より人あまた来る音す。おどろきて見やりたれば、鹿の縁のもとまで来て、うち鳴いたる、近うてはなつかしからぬものの声なり。

秋の夜の妻恋ひかぬる鹿の音は遠山にこそ聞くべかりけれ

知りたる人の、近きほどに来て帰りぬと聞くに、

まだ人め知らぬ山辺の松風も音して帰るものとこそ聞け

記述の表面上のことで言えば、これら二首の間には直接の関係は何もない。したがって二首をまとめて引用することにも何の根拠もないようなものではあるが、こうしてこれらの記事が続けて読んでみると、そこにみごとにまでの構造的対称性が看取されはしないだろうか。それぞれの詠作事情について考えてみよう。まず前歌では曉方の物音に作者は驚かされるわけであるが、この場合の「おどろきて」とは、夢うつつの境からの覚醒を意味すると同時に、彼女は思いもかけない不意打ち的な出来事に驚かされてもいるのではないか。というのは、この山里暮らしの間、作者の意識は専ら都の方（下方）へと向けられていたはずだからである。それが自分の居場所より上方、「山の方より」人の来る音がしたというのだから、作者の驚きようも想像がつこうというものである（鹿の鳴き声に関する『蜻蛉日記』との表現上の類似については今は問わない）。それに対して、「知りたる人」と言う以上、こちらの方は都から来た人と推断されるわけであるから、上方（山の方）からやって来た鹿は「縁のもと」まで近寄って「うち鳴い」て行き、下方（都の方）からやって来た知人は、音（おとない）もせずに帰って行くという、みごとに対称（対照）の構図が浮かび上がるのである。この場面なども、単なる偶然と看過するわけには行かない、構造的照応関係を示す事例と看做してよいだろう。

ところで、そのように構造的対称性を有すると言っても、意味内容の上では、これらの表現は相互に打ち消し合う正負の関係にあるわけではない。鹿は訪い、人は訪わぬという表現は、それぞれ相俟って山里暮らしのわびしさを強調するものでしかない。もっともそうしたわびしさも、「山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」などという述懐を思い合わせれば、むしろこの作者にとっては望むところであったのかもしれないとも思われるのではあるが。

さて、季節はさらに進み、秋も深まって行く。

八月になりて、二十余日の暁がたの月、いみじくあはれに、山の方はこぐらく、滝の音も似るものなくのみながめられて、

思ひ知る人に見せばや山里の秋の夜ふかき有明の月

ここにもまた、山里と都とを対比する視点が貫かれている。先に見た「誰に見せ誰に聞かせむ……」という歌などとも同工のこの歌は、しかし、そうした類同的発想にとらわれることによって、地の文との間にいささか不自然な齟齬を生じてしまったようである。というのも、「山の方はこぐらく、滝の音も似るものなくのみながめられて」という直前の具体的な情景描写が、詠作にまったく反映していないからである。『更級日記』の詠歌は「実情的であるよりは構成的なものであった」⁽¹²⁾という佐藤氏の指摘は、この歌の詠作事情についてもよくあてはまりそうである。

以上、日記の叙述に従って読み進めて来たわけだが、東山滞在記の実質をなす記述としては、右の記事がその最後のものであり、これに続けて、既に引いた帰京途中の田園風景の描写と「苗代の水かげばかり見えし田の刈りはつるまで長居しにけり」という歌とが配置されることによって、首尾照応しつつ東山滞在記は閉じられることになる。そ

して、この後に、東山滞在記の後日譚めいた二つの記事が置かれている。

その最初の記事は次のようなものである。

十月つごもりがたに、あからさまに來てみれば、こぐらう茂れりし木の葉ども残りなく散りみだれて、いみじくあはれげに見えわたりて、こちよげにささらき流れし水も木の葉にうづもれて、あとばかり見ゆ。

水さへぞすみたえにける木の葉ちるあらしの山の心ぼそさに

東山再訪の理由については、例によって何も触れられていないのであるが、このような表現のありようを見るかぎり、初夏から晩秋へかけての日々を過ごした山里の冬の景色を、作者はどうしてもその眼で確認しておきたかった（そして「水さへぞ……」のような歌を詠んでみたかった）のではなかったかと推測される。仮に現実的理由が他にあったとしても、心理的根拠としてはそれ以外に考えられないくらい、右の記述は歌文みごとに呼応して、ひとつの完結した世界を作り上げている。そして、そこに描き出された、うら寂れた冬の山里の「心ぼそさ」は、「そこなる尼に」作者が次のように語りかけたことの、心理的根拠のひとつともなっているに違いない。

そこなる尼に、「春まで命あらばかならず來む。花ざかりはまづ告げよ」など言ひて歸りにしを、年かへりて三月十余日になるまで音もせねば、

契りおきし花のさかりを告げぬかな春やまだ來ぬ花やにはほぬ

一連の東山の記全体のとじめにあたる記事が、これである。若い（十九歳）作者が、「春まで命あらば」などと口にした理由に関しては様々な解釈の可能性がある。冬の山里という場所柄、語りかけた相手が「尼」であることなども、その理由のひとつではあろう。深沢氏の前掲論文では、東山が夕顔葬送の地であることから、「ここでの尼にはひょっとすると、夕顔の亡骸を引受けて弔った、東山辺の惟光旧知の尼や、入水未遂後の浮舟を保護した、小野の尼

たちの連想が働いているのかも知れない」という指摘がなされている。もとより表現上の具体的明証が認められるような問題ではないが、作者の『源氏物語』に対する親昵ぶりや、「浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて……」という述懐が、東山の記の後に位置しているという表現構造などを勘案するとき、可能性の問題としては興味深い読みであることは確かである。さらには、ここまでの作者の個人史の中において、姉や侍従大納言の娘といった人達の夭逝を目の当たりに見聞していることなども、見逃すわけには行かない事実であろう。ことにこの姉が、作者との間に文学的幻想の共同体とでも言うべき関係を成り立たせていたことは、たとえば治安二年七月十三日（姉夭逝の二年前）の「月いみじくまなく明かき」夜、作者とふたり縁に出ていた姉が「空をつくづくとながめて」「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば、いかが思ふべき」と口にした場面などに明らかである。姉のこの言葉は、前後の文脈から推して『竹取物語』を踏まえての発言と思われるが、これを見れば、「春まで命あらば」という作者の言葉も、あたかもこうした姉の口吻が乗り移ったもののようにさえ聞きなされるのである（ただし、仮に作者の言葉に文学的演技を認めるとすれば、そこで意識されているのは『竹取物語』ではなく『源氏物語』であろうが）。おそらく、「春まで命あらば……」というような言葉も、姉との間であったなら何の抵抗もなく通い合っていたはずである。しかし、この場面、東山の尼との間には、そのようなコミュニケーションは成立しなかった。

なぜ東山の尼が作者の頼みに応えなかったのかということについては、秋山虔氏に、「春まで命あらば」といった思わせぶりの言葉を使うなど、物語好きで歌がちな作者を、この世を捨てた尼は相手にしなかったものか」という指摘があるが（深沢氏前掲論文も同意見）、仮にこの言葉が、鼻持ちならない自意識過剰の文学少女の妄言と受け取られるようなものであったと解しても、「花ざかりはまづ告げよ」という若い娘の願いに対する態度としては、意図的な無視黙殺というのはいささかおとなげないようにも思われる。ここは単純に失念したものと受け取っておいても、事

情にそれほど違いはないであろう。いずれにしても、「春まで命あらば」という言葉は、作者にとっては上述したような様々に複雑な思い入れのこめられた言葉だったはずであり、さらには山里で修行に励む尼が相手であればこそ、そうした思いが通じることへの期待もあって、こんな思い入れたっぷりの言葉を口にしたとも想像されるのであるが、事実として作者の側のそうした思い入れがまったく相手に通じていないということは、おそらく東山の尼には、この言葉も、いささか奇矯な挨拶として聞き流される程度のものでしかなかったであろう。結果的に彼女の言葉だけが、ひとりよがりめいて浮き上がることとなってしまったのである。

ところで、我々はこの場面と同じような構図を、継母との関係を描いた次のような記事にも認めることができる。

継母なりし人は、（中略）世の中うらめしげにて、外にわたるとて、五つばかりなる児こどもなどして、「あはれなりつる心のほどなむ、忘れむ世あるまじき」など言ひて、梅の木、つま近くていと大きなを、「これが花の咲かむをりは来むよ」と言ひおきてわたりぬるを、心のうちに恋しくあはれなりと思ひつつ、しのびねをのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか梅咲かなむ、来むとありしを、さやあると、目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。

「世の中うらめしげにて」という事情がある以上、「これが花の咲かむをりは来むよ」という継母の言葉は、社交辞令的な別れの挨拶以上のものではなかったはずである。しかし、その言葉を頼みとして作者は待った。そこには、文学の世界に眼を開かせてくれた継母に対する作者なりの思いの深さが投影されていたとも理解されるが、ひとつの言葉をめぐる思いの深浅において、作者と継母との間には大きな懸隔が存在したのである。東山の尼との関係にしてもそうであるが、人の一生においてこの程度の思いの行き違いは、そのこと自体としてはさして珍しいことではないはずである。ただ、我々としては、そうした事態が孝標女の心にどれほど深い陰翳を刻むことになったかという点だ

けは、見誤ってはならない。思いや言葉が通じ合わないことについて、生涯を俯瞰しつつ書き上げられたはずの日記の中で、作者がこのように繰り返し言及しなければならなかったことの意味を噛みしめるべきであろう。

さて、東山の記の掉尾に置かれた「契りおきし……」という作者の歌は、その内容からしておそらくは東山の尼へ送られたものと思われるが、それならばなぜ尼の返歌が存在しないのであろうか。先に引いた秋山氏の意見は、尼の返歌が存在しないことへのひとつの解釈だったのであるが、『更級日記』には、当然返歌の存在が予想されるのにそれが記されていないという場面は他にも多いから、ここも返歌は存在したはずだと考えることもできる。いずれにしても、問題なのは、実際の返歌の有無よりも、それが記されなかったということである。返歌が記されないことによって明らかになるのは、「春まで命あらばかならず来む」という作者の思いが、所詮はモノローグ的に自己完結するしかないものであったということである。東山滞在中は、山里にあって都人に思い捨てられたかの口吻をもらしていた作者は、かくして都へ戻っては山里の人に忘れ去られてしまうのである。ここにもまた鮮やかな対称（対照）の構図が浮かび上がって来る。しかもそれは同時に、「しづくに濁る人」との心の交流を描きつつ幕を開けた東山の記が、こうしてモノローグめいた天折の思いを口にすることによって閉じられなければならないという意味においても、二重の対照性を示しているのである。

以上で東山の記の読解を終えることとするが、大まかに言って東山の記全体の流れは、明から暗へと方向づけることができそうである。そして、東山の記の直後に置かれている次の歌なども、そうしたバクトルの延長上に位置づけることが可能であると思われる。

竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめしてなにともなきにものぞ悲しき

思春期特有の感傷と言って済ましてしまえばそれまでであるが、少なくとも私にとって、このとき孝標女が風の音を何を聴いていたのか、この悲しみの内実は如何なるものであったのかという問いは、東山の記の読み直しを進める間、心を離れないものであった。そうした問いかけは、それ自体風のようにとりとめもないものではあるが、ともあれ作者の孤独のありよう、他者との関係のありようの中に、考察の糸口くらいは示唆し得たのではないかと思う。いずれこうした問題は、東山の記などという枠組を取り払って、改めて作品総体の中で捉え直して行かなければならないであろう。

注

- (1) 引用は、秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成）に拠る。
- (2) 本稿では、後日譚の部分まで含めた全体を「東山の記」、半年間の東山生活を描いた部分を「東山滞在記」と呼ぶことにする。
- (3) 『国語と国文学』昭六〇・四。
- (4) 『語文』昭六二・三。
- (5) 『国文学解釈と鑑賞』昭六一・一一。
- (6) 『平安文学研究』昭五四・六。
- (7) 高橋文二「『更級日記』小見——薬師仏と審美的イマージュ——」（『国語と国文学』昭六二・一一）。
- (8) 西田禎元氏の指摘する二重回想の表現（『更級日記研究序説』等参照）なども、こうした作品構成の問題と絡めて考えることができるのではないか。作者は、過去へのノスタルジアにとらわれがちな自己の資質をさえも、言うならば「方法」として利用しているのではないか。
- (9) 大岡信『紀貫之』（昭四六）。
- (10) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈 上』（昭五六）。
- (11) 『国語と国文学』（昭四三・一二）。
- (12) (3)に同じ。なお、『更級日記』における歌と地の文の融け合わない関係については、同じ佐藤氏の「更級日記論——その表現の古代性をめぐって——」（『国語と国文学』昭六二・一）の中にも指摘がある。
- (13) 『更級日記』（新潮日本古典集成）頭注。